

## 地域懇談会の開催結果

平成 24 年度に策定する地域の健全な物質循環にむけた「播磨灘北東部地域ヘルシープラン」の作成においては、地域検討委員会における委員の意見とともに地元関係団体の意見を反映させることが重要であると考えられる。そのため、兵庫県等と協議のうえで参加団体を決定し地域懇談会を開催した。この資料では、地域懇談会の開催までの手順と懇談会における意見の整理、今後の課題等について示す。

### 1 開催目的等

#### 1.1 目的

瀬戸内海はかつて「瀕死の海」と呼ばれるほどに水質汚濁が進行したが、水質総量削減制度の導入等種々の規制の成果により水質が改善されてきた。しかし、近年栄養塩類循環バランスが損なわれたことが一因と考えられる漁獲量の減少、ノリの色落ち等の新たな問題が生じており、また赤潮の発生も依然として解消していない状況にある。

そのため、栄養塩類循環バランスを回復あるいは向上させて「再生産可能な生物資源を生み出す海の仕組みが健全」となることを目指し、陸域・海域一体となった効率的、効果的な栄養塩類管理方策を明らかにする必要がある、平成 24 年度には目標の達成に向けた具体的な行動計画である「播磨灘北東部地域ヘルシープラン」を策定させる予定である。

ヘルシープランの作成にあたっては地域の多様な主体の意見を収集し、それらの意見をヘルシープランに反映させることを想定しているため、多様な主体が参加する地域懇談会を開催し、「播磨灘北東部地域の望ましい将来像」や「播磨灘北東部地域の物質循環の健全化に向けて必要な取り組み」等について意見を頂くこととした。

#### 1.2 位置付け

地域懇談会の位置付けは図 1 に示すとおりであり、播磨灘北東部地域ヘルシープランの策定に向けての検討の一部として重要な役割を担っている。

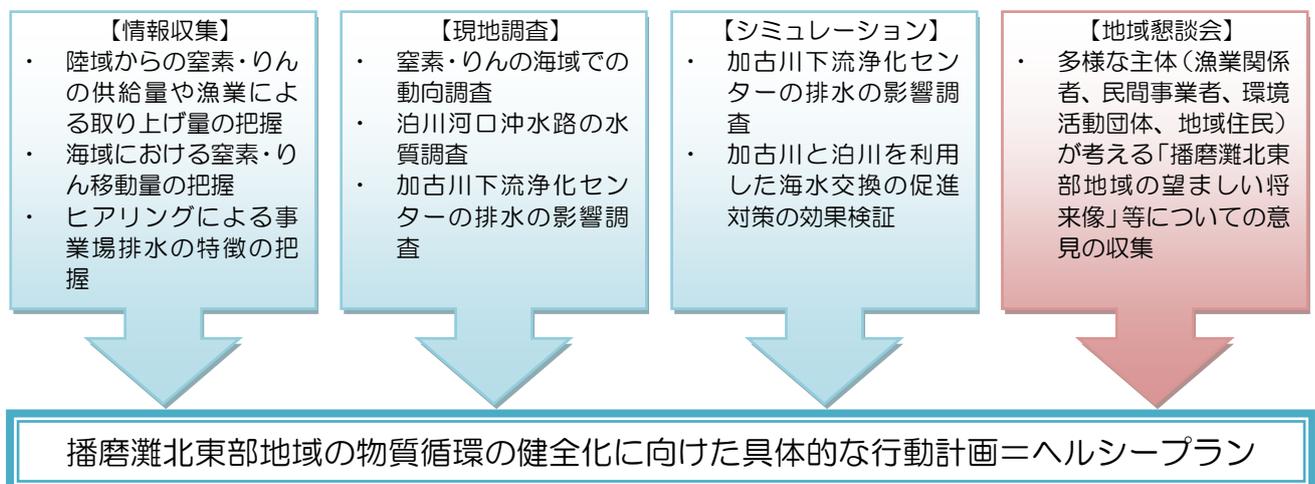


図 1 地域懇談会の位置付け

### 1.3 今後の予定

地域懇談会で地元関係団体より出された意見等については、第3回地域検討委員会で結果の検討を行い、平成24年度作成のヘルシープラン（案）に反映させることとする。その後、そのヘルシープラン（案）について再度地元関係団体に確認を頂き、地域検討委員会での検討を経てヘルシープランを策定する。作業フローを図2に示す。



図2 今後の予定

## 2 開催内容

### 2.1 開催日時

平成24年2月1日（水）13時30分から15時55分まで実施した。

### 2.2 開催場所

加古川市の臨海部に位置する加古川海洋文化センターで開催した。地域懇談会の参加者が当海域の地形や水質等の状況をイメージしやすいように、海に面した施設で実施することとした。場所を図3に示す。なお、加古川海洋文化センターは遊びや学習を通して海洋文化に関する知識を図るとともに、地域の人々の交流を促進するための公共施設（加古川市）である。



図3 地域懇談会の開催場所

## 2.3 参加団体

地域懇談会への参加団体は、漁業関係団体、事業者（商工会議所）、環境活動団体、地域住民（自治会・町内会）と播磨灘北東部地域検討委員会の委員（学識者、行政関係）とし、参加人数は地元関係団体が16名、委員が6名、環境省が1名、事務局が4名の合計27名であった。地元関係団体の参加団体を表1に、委員等の参加団体（参加者）を表2に示す。

表1 地元関係団体の参加団体

分類	参加団体名
漁業関係団体 (4団体)	明石市漁業組合連合会 播磨町漁業協同組合 東播磨漁業協同組合 曾根町漁業協同組合
事業者（商工会議所） (4団体)	明石商工会議所 播磨町商工会 加古川商工会議所 高砂商工会議所
環境活動団体 (4団体)	加古川流域環境ネット 播磨ウェットランドリサーチ 水辺に学ぶプロジェクト リバークリーンエコ炭銀行
地域住民（自治会） (4団体)	明石市連合自治協議会 播磨町自治会連合会 加古川市町内会連合会 高砂市連合自治会

表2 委員等の参加団体（参加者）

分類	参加団体名（参加者名）
委員 (6名)	藤原建紀教授（京都大学大学院） 兵庫県漁業協同組合連合会 兵庫県水産課 水大気課 明石市環境保全課 加古川市環境政策課
環境省 (1名)	閉鎖性海域対策室
事務局 (4名)	（社）瀬戸内海環境保全協会 いであ（株）

## 2.4 プログラム

### (1) プログラム

地域懇談会の会議名称は「播磨灘北東部地域の物質循環健全化に向けた地域懇談会」とし、プログラムを以下に示す。

1. 開会・挨拶 (13:30～13:40)
2. プログラム

- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| ① 海域の物質循環健全化計画検討の事業内容について | (13:40～13:50) |
| ② 環境活動団体による活動事例の紹介        | (13:50～14:30) |
| ③ 播磨灘北東部地域の状況について         | (14:30～14:45) |
| ④ 意見交換会                   | (14:45～15:50) |
| 3. 閉会                     | (15:50～15:55) |

意見交換会では、四つのテーマ（「現在の播磨灘について」、「望ましい播磨灘像とは?」、「実現に向けて必要なことは?」、「意見交換を通じての感想」）についての例を事務局から示した。

## (2) 配付資料

資料は以下に示す資料-1～5の5種類と参考資料の2種類を配付した。

- ・ 資料-1：地域懇談会開催趣旨と海域の物質循環健全化計画検討の事業内容  
地域懇談会の開催趣旨と海域の物質循環健全化計画検討業務についての事業概要について記載した。
- ・ 資料-2：ため池の自然とその保全  
播磨ウェットランドリサーチが活動行っているため池についての機能や環境、課題について説明がされている。
- ・ 資料-3：水辺に学ぶプロジェクト～東播磨の水辺を次世代につなぐために～  
水辺に学ぶプロジェクトの活動目的と活動内容が紹介されており、活動内容についてはため池と川、海辺での活動について記載されている。
- ・ 資料-4：リバークリーンエコ炭銀行  
リバークリーンエコ炭銀行の団体概要、活動の経緯、銀行の仕組み、竹炭の利用方法、新聞記事、これまでの炭フォーラムの取り組みについて紹介されている。
- ・ 資料-5：播磨灘北東部地域の状況－陸から海に入るものが極端に減り、海はやせていく－  
播磨灘海域におけるウチムラサキガイと砂の変遷、陸域からの栄養塩類供給量の変遷について説明がされている。埋立てや砂礫の供給量の減少によりウチムラサキガイが減少し、また陸域からの栄養塩類の供給量の減少により海域の栄養塩類濃度が減少するとともに透明度が増加している事例について紹介されている。
- ・ 参考資料-1：さとうみ（パンフレット）
- ・ 参考資料-2：森・川・海における物質循環と人との関わり（パンフレット）



図 4 配付したパンフレット（左：参考資料-1、右：参考資料-2）

## 2.5 開催内容の決定方法

### (1) 開催日時

#### ・ 開催時期

漁業関係団体においては漁獲対象種によって繁忙度の時期等が変わってくるが、ノリ養殖は冬季に忙しくなる。播磨灘北東部海域においてはノリ養殖が盛んであるため、冬季は避けるべきであったが各種調整の結果、冬季の開催となった。

#### ・ 開催日と曜日

漁業関係団体についてはノリの入札日に出席が難しいため、当該日を避けて日程を設定した。曜日については平日の開催予定で不都合が生じなかったため、水曜日午後の開催とした。

### (2) 開催場所

播磨灘北東部海域における陸域からの栄養塩類負荷量は加古川からの流入が最も多い。そのため、地域懇談会では加古川の影響を受ける海域範囲の関係団体に参加をお願いすることとし、関係団体の参集が容易な場所として加古川市内を開催場所とした。また、2.2でも記載したが、本業務における対象域において、参加者が海域環境を実際に肌で感じて頂くこと（現地見学）を目的に臨海部の会場を選んだ。

### (3) 参加団体

本業務のこれまでの検討結果を踏まえて、本業務に直接関係する団体は漁業関係団体と事業者と考えられた。また、間接的な海域利用が多い団体として地域住民、その中間に位置する団体として環境活動団体とし、それら 4 種類の団体に参加をお願いした。(2)で記載したように、地元関係団体については加古川の影響を受ける海域範囲に存在する団体としたため、明石市、播磨町、加古川市、高砂市の団体とした。なお、参加団体の選定方法については兵庫県と十分に協議のうえ決定した。

- ・ 漁業関係団体  
各市に複数の漁業協同組合があるため、各市の幹事組合や市漁連に参加する組合を選んで頂いた（播磨町は播磨町漁業協同組合のみ）。
- ・ 事業者  
特定の民間企業が参加して発言することが立場上難しいため、各市町の商工会議所（播磨町は商工会）に事業者の代表として参加して頂いた。
- ・ 環境活動団体  
各市町から1団体ずつ抽出することが難しいため、加古川を中心に活動している主要団体に参加して頂いた。
- ・ 地域住民  
各市町の自治会（町内会）から参加して頂くこととしたが、参加自治会を決めることは難しいため、各市町の自治会の連合会に参加自治会（参加者）を選んで頂いた。自治会の連合会は各市町の自治体に担当窓口が設けられているため、自治体の担当課に協力をお願いすることにより、調整が円滑に実施できた。

#### （４） 議題

地域懇談会の参加団体は海域の科学の専門家でないため、業務の説明等については地域検討委員会と異なり専門的な話を極力避けることにより、地元関係団体が理解しやすい内容となるようにした。

また、意見交換会では話題が発散し過ぎないようにテーマを示して議論して頂いた。

### 3 開催結果

#### 3.1 意見の整理

意見交換会で出された意見については「現在の播磨灘について」、「望ましい播磨灘像」、「実現に向けて必要なこと」、「意見交換を通じての感想」に分けて整理した。

##### ① 現在の播磨灘について

- ・ （環境活動団体）海に近づける場所が少ないため、海が遠い存在となっている。
- ・ （環境活動団体）自分たちの子供の頃には播磨灘や加古川河口域で海水浴、潮干狩りなどをした体験があるが、現代の人びとは自然とふれあう原体験がないのではないか。
- ・ （漁業関係団体）窒素、リンの削減対策や、水を確保するための加古川大堰の運用方法など、漁師の立場に立ったものは無く、海の生物という視点が欠けている。
- ・ （漁業関係団体）30～40年間かかってきれいな海にはなってきたが、ウチムラサキガイを放流しても昔のように大きく成長しない。これは、海が生物にとっての良い状態まで戻っていないためではないか。

- ・（漁業関係団体）雨水は加古川大堰で貯留されたり、河川ではなく下水道経由となることで海域への流入の仕方が変わってきている。
- ・（地域住民）悪質な業者による不法投棄が多く、有害物質が地下に浸透するなど、海域への影響を心配している。環境問題の一つとして把握しておいて欲しい。
- ・加古川流域及び河口域に関連し下記の意見が出た
  - ✓（環境活動団体）生物は、生息環境が整えば回復している。（例：ハゼソノマ社など）
  - ✓（環境活動団体）瀬戸内海に流入するごみを減らすために、加古川の下流域ではごみ拾い活動を実施しているが、下流域のみで解決する問題ではない。
  - ✓（環境活動団体）出水時の加古川の流れは、以前は海域方向に向いていたが、近年は対岸に向かっている様な傾向に変わっており、播磨灘の環境の変化に関係があるのではないか。
    - （漁業関係団体）加古川大堰における放流方法の影響ではないか。

## ② 望ましい播磨灘像

- ・（環境活動団体）海に近づける場所が多くあり、海や自然を身近に感じることができる。
- ・（環境活動団体）一般市民の立場からは、透明度が高く泳げる海が良いと考えている。
- ・（漁業関係団体）単純に窒素・りん濃度が高く、透明度が高い海域ではなく、多くの生物が生息することによって濁りや汚濁などが自然の力で改善される海域。
- ・（環境活動団体）森から川を経て海域につながる自然の水の流れが維持され、栄養塩や有機鉄、落ち葉などの物質循環が回復している海域。

## ③ 実現に向けて必要なこと

- ・（環境活動団体）加古川流域では、ため池を放流しても加古川大堰に栄養塩類などが滞留することが考えられるため、留意が必要。
- ・（環境活動団体）ごみ問題の解決に向けて、流域全体で問題に取り組むため、県などの行政による呼びかけが必要。
- ・（漁業関係団体）雨を下水経由ではなく河川経由で海域に流入させることや、加古川大堰について平常時も一定の放流量を確保するなど、河川を通じた水循環の回復が必要。
- ・（環境活動団体）今回の対策の一つである下水処理水の放流水の利用よりも、落ち葉や有機鉄などを多く含む山からの水の循環を良くする方向の方が望ましい。
- ・（事業者）実施できる事項から一つ一つ実施することが重要であり、その際は、漁業者など海の状況を把握している人の意見を参考にすることが大事。
- ・（地域住民）悪質な不法投棄業者の取り締まり強化、摘発の推進が必要。

## ④ 意見交換を通じての感想

- ・（地域住民）陸で暮らしている者にとっては、海については状況が分からないため、

漁業者など海の人の意見が重要と考えられた。

- ・（事業者）海がきれいになった一方で、栄養塩類が不足している事など、一般の人はほとんど知らない内容であり、もっと広めていく必要があると感じた。
- ・（環境活動団体）海の問題解決には林業関係者や農業関係者の参加が必要であると感じた。

### 3.2 まとめ

陸域で活動されている団体（事業者、環境活動団体、地域住民）については海域が遠くになってしまったため、海域で起こっていることが分からないとの意見が多かった。そのため、陸域と海域が一体となって環境改善を実施していくうえでは、海のことを分かっている漁業者と協働して活動を進めていく必要があるとのことであった。

陸域と海域のそれぞれで活動している団体においては陸域からの栄養分が加古川大堰で遮断されているとの認識は共通しており、今後播磨灘北東部地域として物質循環を健全化していくためには流域全体で考えていかなければならないとの意見であった。

下水処理場の窒素排出量増加運転についての漁業者の意見は、漁業者としても苦肉の策として利用しているだけであって、陸域の団体が考えているように森川海の自然の力で問題を解決していくことが望ましいと考えているとのことであった。

## 4 課題

### 4.1 地域懇談会の開催

陸域の活動団体としては海域のことが分からず、またテーマが大きすぎるため（播磨灘北東部地域における物質循環健全化）意見が出しにくいとの指摘があった。今後、地域で懇談会等の会合を開催することについて「播磨灘北東部地域ヘルシープラン」に記載する場合、議論のテーマの絞り込みを課題として挙げることにする。

### 4.2 今後の意見収集

今回の地域懇談会における意見や感想から、陸域で活動している団体と漁業者の交流の場を設けることの重要性が認識された。そのため、継続的に実施可能な会の在り方をヘルシープランに記載していくために、更なる情報収集（ヒアリングやアンケート等）が今後必要であると考えられた。